

国際価値論争とその政策的含意

片岡幸雄

序

中国では改革・開放政策に転換後80年代中葉まで、国際価値論争が華々しく展開された。対外開放政策の中に先進国と発展途上国の貿易関係をどのように位置づけ、積極的貿易政策をどのように展開していくべきか、この問題に関する従来の考え方を正面から再検討する必要性に迫られたのである。マルクスの国際価値に関する議論—とりわけ先進国と発展途上国の搾取に関する論述—をどのように解釈し、積極的貿易政策の礎石となすか、これが最重要課題だったわけである。

筆者は改革・開放政策転換後の中国の貿易理論と政策の展開にいささかの研究時間を割いてきた者であるが、国際価値論争の展開に特に深く関心をもってきた。日本のマルクス主義経済学者の間でも古くから国際価値論争は続いているが、その多くの研究がいささかマルクスの論述の訓詁学的性格に止まっているとの感は払い難く、貿易政策との関連にまで及んでいる例は少ない。筆者の関心は、中国のマルクス主義経済学者がマルクスの国際価値論を踏まえて、どのような形で積極的貿易政策を打ち立てるか、ここにあったのである。

筆者の接するかぎりでは、改革・開放政策転換後、対外経済開放政策に異議を唱える学者はほとんどいないように思われる。したがって、この意味における戦略政策においては、大方の意見の一致がみられているわけである。しかし、このことは論理的枠組の一致を意味するものではないこと

を、筆者は中国の論争の中でみてきている。理論的枠組が異なれば、そこから引き出される政策的含意も自ずと異なってくることは理の当然である。本稿では、中国の論争における先進国と途上国との貿易関係を搾取と位置づける論と搾取関係を否定する論とを対比しつつ、日本での関連論争の一部の成果を筆者なりの解釈でまとめ、若干の意見を提出してみたい。

一 国際価値論争における搾取論と搾取否定論

(1) 搾取論—陳隆深教授の見解⁽¹⁾

陳隆深教授はまず、マルクスが価値法則を国際部に適用するに際して述べている次のような点を重視される。

「それぞれの国には通常の平均強度というものがあって、……任意の一国では、労働時間だけによる価値の測定に改変を加えるものは、平均よりも高い強度だけである。しかし、それぞれの国が構成部分をなすにほかならない世界市場では、事情がちがう。一国の労働の平均的あるいは通常の強度は、国がちがえば同じではない。それはこの国ではより大きくあの国ではより小さい。これらの一国平均は一つの階段を形成しているのであって、普遍的労働の通常の強度がこの階段の尺度単位になっている⁽²⁾。つづいてまた、次のように指摘している。「価値法則は、それが国際的に適用されるばあいには、さらにいっそう大きな改変を加えられる。というのは、より生産的な国が、自国の商品の販売価格をその商品の価値水準まで引き下げることを、競争によって強制されないかぎり、世界市場では、より生産的である国の労働がやはり、より強度の大きな労働として計算されるからである⁽³⁾」。

したがって、「違った国々で同じ労働時間に生産される同種商品のいろいろに違った分量は、不等な国際的価値をもっており、これらの価値は、いろいろに違った価格で、すなわち国際的価値の相違に従って違う貨幣額で、表現されるのである⁽⁴⁾」。

陳隆深教授は、異なった国の間における労働強度のちがいによって生ず

る価値関係の問題に、国際交換上で搾取に関する固有に論ずべき問題は出てこないとされるが、異なった国の間における労働生産性のちがいによって生ずる価値関係の問題においては、国際交換上固有に論ずべき重大問題が出てくると提起される。

「世界市場においては、生産上の効率がより高い国民的労働は、強度のより大きい労働とみなされる。もし、甲乙両国の労働強度が等しいものとして、甲国の労働生産性が乙国の2倍だとすれば、甲国の1労働日の生産する国際価値は乙国の2労働日の生産する国際価値に等しいものとなり、同等の国際価値の交換は、不等労働時間の交換となって表われる。しかし、このような交換は労働強度の大小といったところの事情とは異なる。生産力の変化は価値を表現する労働には影響しないから、〈同じ労働は同じ時間には、生産力がどんなに変動しようとも、つねに同じ価値量に結果するのである。⁽⁵⁾〉したがって、このような交換は不等価交換で、発展度の高い国は商品の価値よりも高く自己の商品を販売する。〈それは、ちょうど、新しい発明が普及する前にそれを利用する工場主が、……自分が充用する労働の特別に高い生産力を剰余労働として実現し、こうして超過利潤を実現するようなものである（傍点部分は著者改訂）⁽⁶⁾⁽⁷⁾〉」。

では、超過利潤の源泉はどこにあるか？教授の見解では、「生産力の変化は価値を表現する労働には影響しない。特別剰余価値は生産力の高い資本が労働過程の中で直接生み出したものではなく、国際貿易の中で発展度の高い国が、商品の価値よりも高く自己の商品を販売することによって得るものなのである。発達した国の労働は、ここでは、〈質的により高級な労働として支払われない労働がそのような労働として売られるからである⁽⁸⁾〉。……国内市場においては、超過利潤は一時的なもので、競争によって生ずる資本移動と技術革新によってすぐにこれは消滅するが、同時にまた、競争によって新たな超過利潤の出現が促進される。しかし、世界市場においては、資本と労働の移動が制約されていることから、旧い型の国際分業においては、先進国は資本と技術上優位にあり、社会的平均的資

本の有機的構成も高く、労働生産性も高い。したがって、先進国は恒常的に超過利潤を得ることになる。マルクスが、〈より富んでいる国が、より貧乏な国を搾取することになる⁽⁹⁾〉と指摘したのは、このためである⁽¹⁰⁾。

したがって、マルクスが『剰余価値学説史』第3巻第20章で述べている搾取の問題は詐取にかかわる不等価交換とは明らかに異なる。

「国際価値論は、国際貿易の中で先進国が発展途上国を略奪、搾取していることを明らかにし、剥き出しの不等価交換のほか、等価交換のなかにも搾取が覆い隠されて存在することを明らかにしたのである。前者は国際価値法則から離反したもので、独占とか、経済外的強制とか、詐欺といったものに基づく。これに対して後者は、国際価値法則の貫徹の結果で、労働生産性の相違が基礎となっている。同等の国際価値交換は等価交換ではあるが、背後に、強度を同じとした不等労働量交換がある。そこには、貧しい国から富める国への価値移転がある。このような交換は、形式上は平等であるが、その中には、実体としては不平等が隠蔽されている。このような状況は、資本と労働の間の交換と同じようなものといえる⁽¹¹⁾」。

(2) 搾取否定論—袁文祺教授の見解⁽¹²⁾

袁文祺教授は一商品に関する統一的な国際価値は世界的な必要労働時間によって決定されると主張され、先の陳隆深教授が典拠とされる『資本論』第1巻の「普遍的労働の通常強度がこの階段の尺度単位になっている」ということの意味は、「この尺度単位は世界労働の平均単位である」ということであると解釈される⁽¹³⁾。

この全体的解釈に基づいて、袁文祺教授は陳隆深教授の労働強度と労働生産性の国際市場における作用のちがいを強調する論を批判され、「労働強度と労働生産性は異なった2つの概念ではあるが、国際価値形成における労働強度の差異と労働生産性の相違の作用は全く同じものとなる⁽¹⁴⁾」と論断される。

「ある一国で資本主義的生産が発達していれば、それと同じ度合いでそ

ここでは労働の国民的な生産性も国際的水準の上に出ている。だから、違った国々で同じ労働時間に生産される同種商品のいろいろに違った分量は、不等な国際価値をもっており、「世界市場では、より生産的な国民的労働も……強度のより大きい国民的労働として数えられる⁽¹⁵⁾」。そして、「強度のより大きい国民的労働は、強度のより小さい国民的労働に比べれば、同じ時間により多くの価値を生産するのである⁽¹⁶⁾」。

「例外的に生産力の高い労働は、何乗かされた労働として作用する。すなわち、同じ時間で同種の社会的平均労働よりも高い価値をつくりだす⁽¹⁷⁾」。したがって、「生産力の高い国民的労働は、世界市場で、強度のより大きい労働が引き起こす作用と同様の作用を引き起こすのであり、同一の時間内に、同種の社会的平均労働よりも大なる価値をつくりだすのである⁽¹⁸⁾」。

以上の立場から、袁文祺教授は先進国と発展途上国との間で行われる貿易においては、“価値移転”は存在しない、また“搾取”も存在しない、と主張される。マルクスはこのことは明確に指摘していると、以下の該当言及を典拠として示される。

「新しい機械を採用する場合、生産の大量がまだ旧生産手段の基礎の上で続けられているあいだは、資本家は商品とその社会的価値以下で売ることができる。といっても、彼は商品をその個別的価値以上に、すなわち彼が新たな生産過程のもとでその商品の生産に必要とする労働時間以上に売るのであるが。……（この場合には、剰余価値は資本家にとっては販売）（括弧内訳者挿入）—他の商品所有者から詐取すること〔Über-vorteilung〕、商品の価格をその価値以上に高くすること—から生じるように見えるのであって、必要労働時間の減少と剰余労働時間の延長とから生じるように見えないのである。とはいえ、これもまた単なる外観にすぎない。労働はこの場合同じ事業部門の平均労働とは違って例外的に〔高い〕生産力を得ている結果、この労働は平均労働に比べてより高い労働になっているのであって、……より高い力能にある単純労働なのである。だが資

本家は、この労働にたいして、平均労働に支払うのと同じように支払う。こうして、〔新たな労働条件のもとでの〕より少ない労働時間数が平均労働のより多くの労働時間数に等しいものになる。資本家はこの労働に平均労働として支払い、しかもこれを、そのとおりのもの、すなわちより高い労働—その一定量は平均労働のより多くの量に等しい—として売るのである。したがって労働者はこの場合、前提にしたがえば、同じ価値を生産するのに平均労働者よりも少ない時間、労働しさえすればよいのである。したがって彼は、じっさい、自分の労賃の等価あるいは自分の労働能力の再生産に必要な生活手段を生産するために—平均労働者よりも—少ない時間、労働するのである。したがって、彼は資本家に剰余労働としてより多くの労働時間数を与えるのであって、まさにこの相対的剰余労働こそが販売のさいに資本家に商品の価格のうちその価値を越える超過分を提供するものにほかならない。だから、資本家はこの剰余労働時間、あるいは同じことであるが、この剰余価値をただ販売でだけ実現するのであるが、しかしこの剰余価値は販売から生じるのではなく、必要労働時間の短縮と、したがってまた剰余労働時間の相対的増大とから生じるのである。⁽¹⁹⁾

同様の観点で、マルクスは国際貿易においても一貫してつらぬいたと袁文祺教授は指摘される。

「まず第一に、生産条件の劣っている他の諸国が生産する商品との競争が行なわれ、したがって先進国のほうは自国の商品を競争相手の諸国より安く売ってもなおその価値より高く売るのだからである。この場合には先進国の労働が比重の大きい労働として実現されるかぎりでは、利潤率は高くなる。というのは、質的により高級な労働として支払われない労働がそのような労働として売られるからである」。「それは、ちょうど、新しい発明が普及する前にそれを利用する工場主が、競争相手よりも安く売っているがそれでも自分の商品の個別的価値よりも高く売っているようなものである。すなわち、この工場主は自分が充用する労働の特別に高い生産力を剰余労働として実現し、こうして超過利潤を実現するのである」。⁽²⁰⁾

以上の立場から、袁文祺教授は次のように結論されるのである。

「世界である国が、他の多くの国でまだ一般化していないような新しい技術を採用したような場合には、労働生産性が高まる。したがって、その国のその商品の国民的価値は国際価値よりも低いものとなる。かくて、この国は世界市場において、国際価値かあるいは国際価値以下なのだが、国民的価値よりも高く販売し、特別剰余価値を実現しうることになるのである。しかし、この特別剰余価値は対外貿易から生じたものではない。つまり、国際貿易に参加した労働生産性の低い国から“移転”してきたものではない。それは、他に先がけて新しい技術を採用し、労働生産性を高めた国の労働者階級の相対的剰余労働によって作り出されたものが、ただ国際貿易を通じて実現したというにすぎない。このような労働は、他国よりも先に新しい技術を採用した国の国内では、質的により高級な労働として労働者階級に報酬が支払われない。しかし、世界市場では質的に高級な労働として売られる。したがって、労働生産性の高い国のブルジョア階級は、対外貿易を通じて、自国の労働者階級の相対的剰余労働時間がつくり出した特別剰余価値を実現するのである⁽²¹⁾」。

二 論争上の対立点

陳隆深教授の見解と袁文祺教授の見解は、マルクスの当該問題にかんする叙述の解釈、世界市場の形成原理とその構造、世界市場における価値法則の作用などに関して大きな隔りがある。ここでは主要な3つの点に関して、両者の対立点を整理しておきたい。

(1) 世界市場の特殊市場構造と国際価値

陳隆深教授の国民経済と区別された世界市場の特殊構造と、国民的価値の世界市場の特殊構造的に規定された国際価値への転化に関する認識は、以下の通りである。

「一国内にあっては、労働の社会化と労働力の自由な移転によって、国

民的労働にはある一つの通常の平均的労働強度というものが形成される。社会的に正常な生産条件の下における平均的労働の生産する価値が社会的価値となり、ある商品の価値と他の商品の価値との比率は、これらの商品に費やされた社会的必要労働時間の比率ということになるのであって、必要労働時間が国民的価値をはるか尺度となるのである。しかし、世界市場においては、労働力の自由移動は存在しないし、労働強度を平均化する構造も存在しないから、平均的労働強度も形成されない。したがって、国がちがえば労働の通常の強度もまた異なる。だから、国際価値は単純に労働の必要時間によってはかることができなくなり、異なった強度の国民的労働を強度の同じ世界労働に換算しなければならなくなる。もしも、甲国の労働強度が基準となる強度の2倍であるならば、同一時間内に甲国は2倍の国際価値を生産することになる。……異なった国で同一労働時間に生産する同種の商品の異なった数量が異なった国際価値をもつというのは、同一数量の商品が同一の国際価値をもつということの前提に立ってのことなのである。⁽²²⁾」

この構造の前提の上に、さらに、「世界市場にあっては、生産上の効率がより高い国民的労働は強度のより大きい労働とみなされる。……国内市場にあっては生産上の効率がより高い個別労働が強度のより大きい労働とみなされないのに、なぜ世界市場にあっては、生産上の効率のより高い国民的労働が強度のより大きい労働とみなされるのか。これは価値尺度の変化と関係する。上に述べたように、国民的価値は必要労働時間によってはかられ、個別労働が生産性の上昇によって労働時間が短縮されようと、生産上の効率のより高い労働が強度のより大きい労働として数えられる必要はないのである。もしも、国際価値が世界的な必要労働時間によってはかられるならば、世界市場においても生産性の効率のより高い労働が強度のより大きい労働として数えられる必要はない。価値法則が国際的にも適用される場合にも、このような変化は起こりえないはずである。⁽²³⁾」

陳隆深教授は、国内市場における「国民的価値」はその市場構造上「必

要労働時間」によってはかれるが、世界市場においてはその市場構造の特殊性の故に、「世界的な必要労働時間」という「標準的価値尺度単位」が形成されないため、上述の状況が生ずるとされるのであり、ここに世界市場の特殊構造性の大きな特徴を認識される訳である。

一方袁文祺教授は、世界市場の特殊構造性に関するマルクスの論述に対する陳隆深教授の解釈は誤りであると批判され、マルクスの論述「一国の労働の平均的あるいは通常の強度は、国がちがえば同じではない。……これらの一国平均は一つの階段を形成しているのであって、普遍的労働の通常の強度がこの階段の尺度単位になっている。」という件りの中で、マルクスは「それぞれの国の労働強度の平均が一つの階段を形成している」とは述べているが、「国際価値が一つの階段を形成している」とは述べていないと指摘される。⁽²⁴⁾

世界市場は、陳隆深教授の解釈による「それぞれの国の労働強度の平均」が即座に「国際価値」としての定在となるような市場構造となっておらず、世界市場ではさらに、陳隆深教授の解釈による「それぞれの国の労働強度の平均」が「世界労働（強度……片岡注）の平均単位」によって整序され、国際価値計算の基礎をえ、然る後に必要労働時間による価値計量が入り込んでくるという仕組みとなっているというのが袁文祺教授の見解である。袁文祺教授は、陳隆深教授の依拠されるマルクスの該当論述部分は、「これらの一国平均は一つの階段を形成しているのであって、その尺度単位は世界労働の平均単位である」と改めて解釈すべきであり、今日ではすでにそのように改訳解釈されていると指摘されている。⁽²⁵⁾

(2) 国際価値の規定

袁文祺教授の立場からすると、世界市場においては統一的な国際価値が成立し、この国際価値は世界的な国際労働時間によって決定されることになる。袁文祺教授はマルクスの論述を引用して、次のように論断されている。

「マルクスは、世界的な必要労働時間が国際価値をはかる尺度だという点については、関連議論のなかではっきりとのべている。マルクスはつぎのように指摘している。〈たとえば綿花のそれ（価値尺度……片岡注）は、イギリスの労働時間によって決まるのではなくて、世界市場における平均的に必要な労働時間によって決まる⁽²⁶⁾〉。したがって、マルクスの価値決定論によると、世界的な必要労働時間を出た労働は価値を形成しない⁽²⁷⁾」。

一方陳隆深教授は、上述したような世界市場の特殊構造的性によって、世界的な必要労働時間による統一的な国際価値の形成を否定される⁽²⁸⁾。したがって、陳隆深教授の見解からすると、国際価値とは、世界市場における価格の前提としての位置にある、国民的価値の国際的に転化した価値のことである。実体そのものとしては、それは国民的価値であり、正確な用語としては国際価値ではなく、国民的価値である。国民的労働は世界的労働に転化し、国民的価値は国際的価値に転化するが、それは労働強度と労働生産性の2つの面で現象する。

労働強度に関する側面では、国内の価値決定と異なり社会的に必要な労働時間によって価値決定は行われなから、国民的労働強度がそのまま比例的関係として現われる（国内では一定の強度以下のものは価値存在とならない）。労働生産性に関する側面では、労働生産性の高い国民的労働は強度の大きい労働として数えられる、すなわち、国民的価値の増幅された存在としての国際的価値に転化する。しかし、これは世界市場における価格の前提としての国際的価値ではあるが、飽くまでも価値の実体としては国民的価値なのである⁽²⁹⁾。

(3) 価値移転論と価値移転否定論

上にみてきた両者の立場からすれば、先進国と発展途上国との間の貿易における価値移転の有無（搾取関係の有無）に関する結論は、全く正反対のものになる。

すでに述べたように、陳隆深教授の立場からすれば、各国民労働の国際

的価値に応じた交換においては、高い労働生産性の下で生産された先進国の商品と、低い生産性の下で生産された発展途上国の同一商品は同等の価値として数えられることとなり、実質上の投下労働量による価値関係としては不等労働量交換となり、発展途上国から先進国に価値の移転が生じ、国際間における構造的な搾取関係が形成されることとなる。⁽³⁰⁾

一方袁文祺教授の立場からすると、世界市場における統一的な国際価値は世界的な必要労働時間によって規定されるという理論的枠組となっているから、同一商品に関する各国の国民的価値は統一的な国際価値形成の過程で止揚されてしまい、それ自身の独立性を喪失する。発展途上国の低い労働生産性で生産された商品は、国民的価値で測るかぎりにおいては価値は大きい、統一的な国際価値としてはそれだけの価値をもっていない。先進国の高い労働生産性で生産された同一商品は、国民的価値としては価値は小さい、統一的な国際価値としてのそれだけの価値を創り出し、それだけの価値をもっている。したがって、両者の関係においては、発展途上国から先進国への価値の移転は存在しないし、もともと移転する価値は創り出されていない。先進国と発展途上国の間の正常な貿易関係にあっては、前者による後者の構造的搾取関係は存在しない。先進国がこのような貿易から得るかに見える超過利潤は、先進国の労働者の相対的剰余労働時間によって創り出された超過剰余価値に由来するものである。⁽³¹⁾

しかし、袁文祺教授の立場からすると、マルクスが『剰余価値学説史』第3巻第20章の中で述べた「より富んでいる国が、より貧乏な国を搾取することになる」という文言をどのように解釈したらよいかという問題が出てくる。袁文祺教授はマルクスの関連論述段落について、次のような解釈を行っている。

問題となるマルクスの関連論述段落は以下の通りである。

「セーは、コンスタンシヨによる仏訳のリカード『原理』への彼の注解のなかで、ただ一つだけ対外貿易について正しい発言をしている。利潤は、一方が利益を得て他方が損をするという詐取によっても得ることができ

る。●●●の国の内部での損失と利得とは相殺される。違った国のあいだではそうしたことはない。△そして、リカードの理論でさえも—セーは述べていないことだが—ある国の3労働日は他の国の1労働日と交換されうることを考察している。この場合には価値の法則は本質的な修正を受ける。そうでない場合には、一国の内部で、熟練した複雑な労働が未熟練で簡単な労働にたいしてどうであるかということも、違った国々の労働日が相互にどうであるかということも、同様であろう。このような場合には、より富んでいる国が、より貧乏な国を搾取することにより、それは、たとえばとのほうの国が交換によって利益を得るにしても、そうである。このことは、J・St・ミルも彼の『経済学の未解決の諸問題に関する試論』のなかで説明しているとおりである⁽³²⁾。

袁文祺教授によれば、マルクスが文中の△印のついたところまでで述べているのは詐取に関する内容のものであり、この点について学界に意見の不一致はないといわれる。しかし、後段の部分の解釈については意見が分かれるとされ、陳隆深教授の説を引き合いに出され、陳隆深教授の解釈—後段でマルクスが述べているのは詐取による搾取ではなく、等価交換の中に覆い隠された搾取であるとの解釈—を批判される⁽³³⁾。

袁文祺教授の批判は以下の3点に要約される⁽³⁴⁾。

- ①袁文祺教授の国際価値に関する解釈からすれば、すなわち「世界的労働の平均単位」という国際的な尺度によって測るならば、「ある国の3労働日は他の国の1労働日と交換されうる」ということの内容は、国際価値上では同一価値となる。すなわち、いかなる搾取も存在しない。
- ②マルクスはここで、「一国の内部で、熟練した複雑な労働が未熟練で簡単な労働にたいしてどうであるかということも、違った国々の労働日が相互にどうであるかということも、同様であろう。」と述べている。このことの意味は、「複雑労働と単純労働との関係は、1単位の複雑労働が何単位かの単純労働に等しくなること、あるいは、複雑労働

働によって生産された1単位の生産物の生産物は、価値的に、単純労働で生産された生産物の何単位かに等しくなるということ、これら2つの生産物は正しく等価交換として立ち現われ交換されるのであって、複雑労働の側が単純労働の側を搾取するという搾取・被搾取の関係として生起されてくるものではないということ」である。したがって、マルクスがいう「より富んでいる国が、より貧乏な国を搾取することになる」ということは、「等価交換の中に覆い隠された搾取」を意味しているのではない。

- ③上述の①と②のことから考えると、マルクスが「このような場合には、より富んでいる国が、より貧乏な国を搾取することになる」と述べている中での「このような場合には」というのは、袁文祺教授の規定による国際価値に基づかないような交換、すなわち「詐取によって」の貿易だと主張される。この点に関しては、袁文祺教授は王林生教授の見解に賛成され、マルクスの該当箇所は、正しくは王林生教授の以下の解釈であるべきであるとされる。「たとえリカードの理論どおり、一国の3労働日が他の国の1労働日と交換されるとしても、やはり富国は詐取によって、安く買い高く売ることによって、貧しい国から利潤をかすめ取る⁽³⁵⁾」。

三 世界市場の特殊構造的性と国際間搾取の含意

隆陳深教授の見解と袁文祺教授の見解、両者の意見の対立点を整理すると上述のようになるかと思われるが、ここで日本の国際価値論争の成果を踏まえつつ、両者の見解に対する筆者なりの意見をまとめてみたい。

まず、世界市場において世界（国際）市場価値が客観的な存在として成立するか否かについて考えてみたい。

(1) 世界（国際）市場価値論の評価

周知のようにマルクスが国内の価値法則を総括的に展開する場合、価値

→市場価値→生産価格として論理展開している。陳隆深教授も袁文祺教授も、国内の価値法則の貫徹形態との対比でいえば、世界（国際）生産価格を否定しておられるから、この意味からして世界市場は先ず特殊の性格をもった市場であることが確認できる。⁽³⁶⁾しかし、ここでの問題は、価値→市場価値の関連が国内市場と世界市場で同様の関係に立つか否かである。

成程世界（国際）市場価値の成立を主張する論者が屢々考えるように、世界市場で同一商品で競合に立つ貿易当事国は直接競争の関係に立つ。恰も国内の同一部門の生産者達が直接競争関係に立つかの如くにである。しかしながら、この世界市場における競争の関係は、国内における同一部門の生産者達の競争とは異なっている点に注意しなければならない。世界市場で同一商品で競争的关系に立つ貿易当事国は、その競争的关系の前提としてかの“比較生産費説”の原則にしたがった上で、世界市場における競争的关系に入っているのである。“比較生産費説”に沿った分業関係に基づく競争的关系は、国内の、“比較生産費説”によるものではない、直接的競争関係とは根本的に異なる。リカードのモデルを見ればすぐわかるように、交易当事国のうちいずれの部分でも生産力の劣った国は、直接競争関係に入ることはできない。陳琦偉教授の正に指摘するように、「比較利益の存在は、遅れた労働生産性の低いところで生産された生産物も、世界市場で一定の地位が得られるということの意味するのである」⁽³⁷⁾。

マルクスが国内において価値→市場価値を論理展開する場合、以下ののような前提的意味が含まれている。

先ず、労働の強度については、すでに陳隆深教授が本稿の冒頭の部分でマルクスの叙述を引用しておられるとおり、それぞれの国には通常の平均強度というものがあって、この強度が欠けると労働は一商品の生産において社会的に必要な時間よりも多くの時間を費消し、したがって、標準的な質の労働として計算されない。任意の一国では、労働時間だけによる価値測定に改変を加えるものは、平均よりも高い強度だけである。

労働の生産性についてはどうであろうか。

マルクスは、『資本論』第1巻第10章の中で次のように述べている。

「新たな生産様式が一般化され、しがってまた、より安く生産される商品の個別的価値とその商品の社会的価値との差がなくなってしまうば、あの特別剰余価値もなくなる。労働時間による価値規定の法則、それは、新たな方法を用いる資本家には、自分の商品をその社会的価値よりも安く売らざるをえないという形で感知されるようになるのであるが、この同じ法則が、競争の強制法則として、彼の競争相手たちを新たな生産様式の採用に追いやるのである」⁽³⁸⁾。

マルクスはここで「労働時間による価値規定の法則」が、2つの作用を發揮するのと述べているのである。第一の作用は、新方法を採用した資本家に対する作用で、この資本家は自己の商品をその社会的価値よりも安く売らざるをえないという形で作用する。この作用は国際間においても働く。マルクスはこの作用については、『資本論』第1巻第20章で明確に述べている。すなわち、「より生産的な国が、自国の商品の販売価格をその商品の価値水準まで引き下げることが、競争によって強制されないかぎり、世界市場では、より生産的である国の労働がやはり、より強度の大きな労働として計算されるからである。」⁽³⁹⁾と述べているから、この点ははっきりしている。

第二の作用は、ある資本家が他に先んじて新方法を採用すると、新方法を採用していない同部門の資本家たちに対して、新たな生産方式の採用を強制するように働くという作用である。この強制的作用は国際間では作用しない。国際分業が“比較生産費説”に沿った形で行われる所以である。国際間では同一部門内でも異なった労働の国民的生産性が存在している。

マルクスが国内の価値→市場価値の論理展開をする場合、上に述べたような社会的関係の実体構造を踏まえた上で、市場価値概念を設けている。市場価値概念は、理論的には同一部門内の個別経営単位の労働生産性の同一化に向かつての収斂が保証される条件下で規定される価値実体を全体とした、競争的次元で措定される概念である。この意味の内的社会的概念が

前提として設定されていない市場価値概念は、具体的商品に関する生産性の価値規定に対する役割を見失い、意味がなくなってしまう。市場価値概念は上述の内的社会関連を前提として設定しているが故にこそ、競争の過程における一応の均衡条件下における価値実体とも等値される意味をもつと筆者は考えている。

このような観点に立てば、「国際間では価値法則は労働の強度と生産性に対する規定的作用を失っている⁽⁴⁰⁾」のであり、「世界市場においては、〈社会的に必要な労働時間〉による規定的作用は存在しないのであるが、その理由は、一つにはこの法則は各国の国内でしか作用しないからであるが、もう一つには世界市場においては、商品毎に単一の〈社会的に必要な労働時間〉なるものは存在しないからである。存在しないものは作用しようがないのである。したがって世界市場には、単一の社会的価値も市場価値も存在しないのである⁽⁴¹⁾」。

この点に関しては、「世界市場における競争では、国際価値は形成されない。……各国が構成部分となっている世界市場においては、各国の社会経済形態や経済発展の水準が異なり、労働生産性の相違も大きい。このような状況の中で、どのようにして平均水準をとるのか。」とされる⁽⁴²⁾、王賽恵女史の見解に筆者は賛成である。

また、宋承先教授の世界（国際）市場価値論に対する内在的批評にも、筆者は賛同している。宋承先教授の批判は大別2点にわたる。

第一の批判は、世界（国際）市場価値論における国際的な社会的必要労働の理論的取り扱い方に対する批判である。国際交換の均衡関係にある種類の異なった2つの商品は互に同一の国際価値関係にあり、同一の国際的な社会的必要労働を内蔵している。一方の商品にどれだけの国際的な社会的必要労働が含まれているかは、この商品の国際価値（相対する商品の国際的な社会的必要労働）によって決められざるをえない。それ自体の商品に含まれる社会的必要労働は、いまだ国際的な社会的必要労働ではないからである。したがって、「定義という方法によって、実際にそれぞれの国

で要した社会的必要労働が、国際的な社会的必要労働に換算されるということになる。このことは取りも直さず、すでにわかっており、すでに定まっていると仮定された国際価値によって、国際的な社会的必要労働という数値への換算がなされる、ということたらざるをえない。だからここでは、国際価値が国際的な社会的必要労働を決めているということに変わってきているのであり、この説の本来の主張である、国際的な社会的必要労働量が国際価値の大小を決定するというに、なっていないということになるわけである⁽⁴³⁾。「この理論は実体としては、原因と結果が相互的に決定されるという循環論、あるいは前提と結論が相互的に条件となり合っているという同義反復⁽⁴⁴⁾」になっているわけである。

第2の批判は、国際的な社会的必要労働が決定されるそのされ方に対する批判である。貿易に入り込む一つの商品の国際的な社会的必要労働は、当該商品の世界市場における競争に参加する各国の、それぞれの社会的必要労働の加重平均の数値によって決定されるというのが、世界（国際）市場価値論者の主張であるが、問題は次の点にある。「国際価値が国際的な社会的必要労働によって決定されるというこの理論が、間違いなく成立するといっても、それは、予め加重平均法によって算定するという想定で出てきた、国際的な社会的必要労働の値（これはすべて生産条件によって規定される）が、これとは別の要素（当然この中にはブドウ酒とラシャの生産条件という要素も含まれるが……リカード比較生産費説の説明における……傍点部分の文言は片岡注）によって決定される、その値の国際価値と丁度同じものになる、というにすぎないということである。言い換えると、加重平均法によって算定された国際的な社会的必要労働が、国際価値を決定しているといえるのは、想定された2つの国際的な社会的必要労働の値が、丁度国際価値の値と同じものになるという、正にこのことの故である。だからこれは、結論が前提のなかに含まれている、理論上の典型的な同義反復の推理ということになるわけである⁽⁴⁵⁾」。

(2) 国際貿易における搾取問題

次に、国際価値規定と国際貿易における国際的搾取問題について考察を加えてみたい。袁文祺教授の観点からすると、世界市場においては統一的な国際価値が成立し、この統一的な国際価値は世界的な必要労働時間によって決定される。世界的な必要労働時間によって決定される国際価値こそが創出された価値である限りにおいて、生産性の低い発展途上国で国内労働で計算して、生産性の高い先進国の国内投下労働よりも多くの労働が投下されていたとしても、その発展途上国の労働は価値を創りだしていないのであって、この貿易関係の中では国際間の価値移転は生じないし、搾取関係も生じない。世界（国際）市場価値論者の立論の前提が正しいとするなら、その限りにおいて結論も肯定される。

木下悦二教授も世界（国際）市場価値論に否定的態度をとられているが、世界（国際）市場価値論の立論の論理からするならば、論理的に貿易を通ずる国際間の搾取論は成り立たないとされる。「市場価値論でもって搾取を説くことには賛成できない。というのは、筆者の理解する限り、価値の本質は単なる労働ではなく“社会的に必要な労働時間”である。すなわち、社会的評価を受けた労働時間である。したがって、価値とはすべて社会的価値である。市場価値論でいう個別的価値とは競争法則を説明するために与えられた単なるフィクティブな価値概念である。だから、市場価値論から搾取論を導くことはできないと思う⁽⁴⁶⁾」。

世界（国際）市場価値論による国際間の搾取否定論が首肯されるとするならば、『剰余価値学説史』第3巻第20章のかの「より富んでいる国が、より貧乏な国を搾取することになる」という文言の解釈は、先に示した袁文祺教授、王林生教授の解釈とならざるをえまい。しかし、世界（国際）市場価値の成立に疑問をもつ筆者の立場からすれば、袁文祺教授、王林生教授の解釈には賛成できない。

筆者の解釈では、上に示したマルクスの叙述のうち、「リカードの理論でさえも……違った国々の労働日が相互にどうであるかということも、同

様であろう。」までの文言は、世界（国際）市場価値に基づく交換関係にかんする言及ではない。「リカードの理論でさえも……このような場合には、より富んでいる国が、より貧乏な国を搾取することになる」のくさはり、価値法則の本質的な修正の内容とその性格にかんする叙述であり、「そうでない場合には、……違った国々の労働日が相互にどうであるかということも、同様であろう。」は、価値法則の本質的な修正はうけるが、国際市場価値によって結合された価値関係について述べているのではなく、各国の国民的労働相互間の関係について述べているものと思われる。だからこそ、直前の文章によって規定された条件の下でのという意味で、「このような場合には、……」という理論の運びとなると解釈される。袁文祺教授、王林生教授の解釈にはやはりいささか無理がある。

世界（国際）市場価値論に基づく国際交換の解釈に批判的な筆者は、それでは陳隆深教授のようなその解釈に全面的に賛成できるであろうか。筆者は陳隆深教授のその解釈にも全面的には賛成できない。

陳隆深教授は、貿易関係にある貿易当事国の労働強度を同一として両国の間で労働生産性に差異のある場合、生産性のより高い国の労働は強度のより大きい労働とみなされ、両国の同一労働時間に生産する国際的価値は両国の労働生産性に比例したものとなり、マルクスの価値規定—生産力の変化とかかわりなく同一労働は同一時間に同一の価値に結実するというかの規定—からして、このような貿易取引は不等労働量交換となり、労働生産性の低い国から労働生産性の高い国に超過利潤の形で価値移転が生じ、労働生産性の高い国は労働生産性の低い国を搾取することになると主張される。

筆者の理解では、人間の労働は価値創出の出発点であることにまちがいないが、人間の同一労働の同一時間労働量が、何の社会的条件とも無関係に即同一の価値を形成する事にはならない。価値はすでに述べたように社会的に形成され、規定された存在の価値である。具体的には価値→市場価格→生産価格という実体的に統合された組織体系の社会的基盤においては

じめて、その体系内の人間の同一労働の同一時間労働量が同一価値となるのである。筆者のすでに述べてきた観点からすれば、世界市場においては市場価値や生産価格は形成されないと考えられるから、世界労働という観点から見た、国際間における人間の同一時間労働量の価値次元における議論は、その実体的基礎をもっていないと言わなければならない。

一国内においては、部門間においては同一労働の同一時間労働量は同一の価値として交換されるし、部門内においても先に指摘したように個別価値は構造的には同一価値に向かって収斂していくというメカニズムが内蔵されているから、同一労働の同一時間労働量は同一の価値となるというのが全体的姿である。しかし、同一部門内において必ずしもそうならない場合について、マルクスは特別に言及している。マルクスの著述からの引用文(19)に示される「同じ事業部門の平均労働とは違って例外的に〔高い〕生産力」の下で生産される価値がそれである。ここでは、同一労働の同一時間労働量は同一の価値に結果しない。当該商品の価値はこの商品を生産するに要する“社会的必要労働時間”によって決まるから、個別価値は投下労働量によって規定されるが、価値は生産力に反比例するのではなく、生産力に比例する。マルクスの著述からの引用文(17)に示されるところである。マルクスは、同一労働の同一時間労働量がいつでも同一の価値を創り出すとは考えていなかったことを、ここで確認しておかなければならない。

陳隆深教授は、世界労働としての同一労働の同一時間労働量が同一価値に結実するとの観点を重視され、例外的に高い生産力をもつ国とそうでない国との間の価値関係で、筆者が上に指摘したマルクスの観点を軽視されている。この点では、王林生教授が、「労働生産性の高い国は、生産物の価値が国際価値よりも低いために超過利潤をえる。これは変形した相対的剰余価値の転化形態である。」⁽⁴⁷⁾と述べられているのは正鵠を得た指摘と思われるが、王林生教授、袁文祺教授の観点は世界市場において世界(国際)市場価値が形成されるとの認識から論を展開されているという意味で、筆

者とは立場が異なるのである。

筆者の立場からするならば、価値関係は一国内部でのみ問題となり、国をまたがった人間の同一労働の同一時間労働量の価値関係は論ずることができない。

“比較生産費説”に沿って行われる労働生産性の高い国と労働生産性の低い国との貿易関係の中にあっても、両国は比較優位に沿って輸出を進めると、各々輸出超過利潤をえることができる。比較優位部門の輸出商品の国内的価値の転形としての国際個別価値と世界市場価格（その貨幣形態を取り去ったものをあえて規定して名づければ国際市場価値とでも呼んでもよいが、世界〈国際〉市場価値論者のいう世界〈国際〉市場価値とは概念が異なる）との差額として輸出超過利潤が出てくるのである。

しかし、この超過利潤は世界（国際）市場価値論者の言うように、相対的剰余価値の転化形態としての特別剰余価値に基づくものではない。確かにマルクスは彼の著述からの引用文（20）に示されるように、輸出超過利潤の性格を特別剰余価値に基づくものに譬えている。譬えていっていることは、その通りのものだといっているということではない。

今ここで詳細にこのことについて論を展開する余裕がないが、2つの主要な理由をあげておこう。

第一は、先にも述べたように輸出超過利潤は労働生産性の高い国においても、労働生産性の低い国においても発生するという点である。

第二は、世界（国際）市場価値が形成されなければ、特別剰余価値に基づく超過利潤は説明できないということである。筆者の理解からすれば世界（国際）市場価値は形成されないと考えるから、この超過利潤は特別剰余価値に由来するものではない。この超過利潤が特別剰余価値に基づくものでないとするならば、この超過利潤の源泉は実体としての労働が創り出した価値ではないということになる。

それでは輸出超過利潤は何に由来するのであろうか。筆者は木原行雄教授の説を支持したい。木原教授の結論はこうである。労働生産性の高い国

と労働生産性の低い国との間の貿易関係の中にあっても、「2国2商品のどちらの輸出についても、大なり小なりの超過利潤が成立するものと考えらるべきである。……それらの超過利潤はその価値実体としての労働を自国労働としても相手国労働としても直接には持っていないと見なければならぬ」⁽⁴⁸⁾。「輸出による超過利潤は、一般的には国際間における労働および価値の換算から必然的に生じるものであって、この場合には貿易相手国から輸出国への価値の一方的流出を必ずしも伴わない」⁽⁴⁹⁾。「輸出による超過利潤の源泉は相手国労働の搾取によると言うよりはむしろ、国際価値法則によって規制される商品交換過程それ自体の中にあると考えるべきであろう」⁽⁵⁰⁾。

残された本稿の紙幅であと2つの問題に触れておきたい。

一つは、袁文祺教授が持ち出されているマルクスの著述からの引用文(26)に関する問題である。筆者の理解からすると、このマルクスの叙述の内容は王賽恵女史の解釈によるのが妥当であると思う。マルクスがここでいう「世界市場における平均に必要な労働時間」というのは、世界市場において大量を占める中位の価値の国が生産するに要する平均的必要労働時間という意味だと思う。王賽恵女史は次のように述べている。「世界市場で商品の需給が等しくなっているときには、市場の需要は大量を占める中位の価値の商品の供給によって満足させられる。中位の国際価値よりも低い国際価値の商品には価値超過分が出、中位の価値よりも高い国際価値の商品は、その中に含まれる価値を全部は実現できないことになる」⁽⁵¹⁾。

今一つの問題は、『剰余価値学説史』第3巻第20章のあの「より富んでいる国が、より貧乏な国を搾取することになる」の文言を、筆者の立場からするとどう解釈するかである。

多くの点で意見が一致する木原行雄教授と筆者の基本的見解は、商品の生産に投下された労働量が必ずしも即商品価値を決定するとは限らないとの見方である。マルクスが「より富んでいる国が、より貧乏な国を搾取することになる」という問題を提起するとき、それに先んじて「ある国の3

労働日は他の国の1労働日と交換されうる」と述べていることは、ここで注意を払ってみるべきことのように思われる。マルクスはここで「労働日」という言葉を用いているのであり、ここでいう「労働日」が即座に同一の価値を形成するといっていることとは限らないのである。

マルクスがここで言っているのは、一国内の交換と異なって、「ある国の3労働日は他の国の1労働日と交換されうる」ということで、労働量の交換でみるかぎり不平等な交換となるといっているにすぎない。国際間に統一的な価値関係が成立しないとみる筆者の観点からすれば、出発点としては世界労働としての性格をもつ労働が、具体的な労働としては国民的制約を受けた労働となり、世界労働の性格を奪われてしまい、国民的生産力に制約されてはじめて実体をもつ、有効な価値となるかぎりにおいて、価値は生産力に制約されたものということになる。“比較生産費説”に沿った国際分業はこのことを前提として組織されるから、その内部に世界労働としての性格が実体的に内化される仕組みになっていない。したがって、労働生産性の高い国と労働生産性の低い国との間の貿易関係の中では、労働生産性の低い国の労働は、世界労働としての分配請求力をそのまま保持した価値として結実しないのである。それは、「一国の場合と異なり国際間では、生産性の格差が労働量とは無関係にそのまま価値量の格差を形成することから起こるのである⁽⁵²⁾」。

“比較生産費説”に沿って展開される貿易関係は、世界労働に応じた分配という観点からみれば、世界労働に応じた分配を拒否する機構として成立している。労働生産性の低い国の労働は、世界労働としての分配請求力を内蔵しない価値にしか結実しないからである。したがって、労働生産性の高い国と労働生産性の低い国との間の貿易関係の中では、価値の次元においては、後者から前者への価値の移転はなく、両者の間に搾取関係は存在しないといえるが、労働という次元においてはその発動された労働は平等な分配請求力が一部制約され、労働の一部が対価を受けずに失われる。これは、「価値形成の社会関係を通じての間接的な搾取的関係であ

ると見るべきであろう⁽⁵³⁾。

マルクスが「より富んでいる国が、より貧乏な国を搾取することになる」と述べていることの意味は、筆者の解釈では、上に述べたような社会関係として形成される、労働の次元における構造的に大規模な不平等な交換が強制される機構の内実をいっているのだと思う。

四 途上国貿易政策の論理構造

労働生産性の高い国と労働生産性の低い国の間の貿易関係の中における主要な問題は、この間における搾取問題であるとの認識に立たれる陳隆深教授は、労働生産性の低い国すなわち発展途上国の貿易政策の基本的視座を次のようにすえられる。

陳隆深教授の立場からすれば、発展途上国は国際貿易関係を通ずる搾取をなくしていかねばならないということになるが、このためには途上国は民族経済を発展させ、長期的観点に立って労働生産性を不断に高めていかねばならないと主張される。「労働生産性が低ければ、搾取を受けるほかはないということ、このことは不動の真理である。……労働生産性の低いのは宿命なことではない⁽⁵⁴⁾」。旧い国際経済秩序のなかでは、途上国は自国の生産性を急速に高めていく積極策を打ち出せなかった。しかし、第二次世界大戦後は途上国が従来押しつけられていた帝国主義や植民地主義は崩壊していつている。この条件の下では基本的には搾取が存在しているが、国際分業の利益を積極的に活用し、労働生産性の格差を縮めていくことができる。

搾取論の立場に立つからといって、その除去のために貿易関係自体を直接に拒否するとか、敗北主義的にこれを受動的に受け入れるという方策を採用することはできない。新しい国際経済秩序を打ち立てるためには、旧秩序におけるような非経済的な力による収奪、独占的な力による搾取、伝統的な国際分業を固定、維持しようとする企図に対して闘っていかなければならない⁽⁵⁵⁾。これが陳隆深教授の主張である。

陳隆深教授のこの主張に対して、袁文祺教授は次のように判断される。

第一に、中国は先進国に比べれば労働生産性が低く、いくつかの発展途上国に対しては労働生産性が高い。搾取論の立場からするならば、どちら側に対しても積極的に貿易を推進していくことができなくなるではないか。

第二に、このことから南南貿易と経済協力は不平等な関係の上に打ち立てられるということになり、新しい国際経済秩序を構築していく上での基礎が理論的には極めて弱いということになるではないか。⁽⁵⁶⁾

「労働生産性の相違にもとづく搾取論」の立場は、理論的にも根拠に乏しく、実践的にも、わが国が対外経済と貿易関係を強力に拡大・発展させていく上で、また、南南貿易と経済協力を発展させていく上で、都合が悪いものとなろう。さらにまた、この立場は、今日第三世界の国々が、旧い国際経済秩序を打ち倒し、新しい国際経済秩序を打ち立てていく上でも、具合が悪いものになろう⁽⁵⁷⁾」。

袁文祺教授は陳隆深教授の政策的主張に対してこう批判されるわけであるが、袁文祺教授の批判は、上にみるところからすれば名指して批判されているとはいえ、直接的に陳隆深教授の見解に対してなされたものというよりも、国際的な搾取論から引き出される可能性のある短絡的、あるいは急進的、または消極的な政策論に対して向けられているとみられる。陳隆深教授は上にみる通り、短絡的、あるいは急進的、または消極的な政策論を退けておられる。袁文祺教授の搾取論から引き出される政策に対する批判の主眼は、旧秩序におけるような非経済的な力による取奪や独占的な力による搾取などの事実と、ここにいう国際的な搾取論が奇妙な形で結びついて、短絡的、あるいは急進的な排外的貿易軽視論がかつて政策形成に大きな役割をもったことに対する危惧にあったとみるべきであろう。この意味では、国際貿易の搾取論はその胎内に危険な要素をもっていることを踏まえて、政策的課題に取り組んでいく必要があるだろう。

一方、世界（国際）市場価値論の立場に立つ袁文祺教授の側からは、「国際貿易にかぎっていえば、旧い国際経済秩序を打ち倒すという主要な任務

と目的は、歴史上長期にわたって貫かれてきた帝国主義と新旧植民地主義の体制を、根本的に改めるということである。すなわち、独占的な形で先進国が工業製品を高く売り、第一次産品を安く買うとか、強制とか詐欺とかの経済外的手段によって、第三世界の国々を搾取してきたのを改め、交易条件を改善するということなのである。しかし、このような不等価交換と搾取は、先進国と第三世界の国々との労働生産性の相違と無関係である。したがって、今日の古い国際経済秩序を打ち倒す闘争の目的は、労働生産性の相違によってもたらされる、いわゆる不等価交換に反対するというところにあるのではない。そうではなく、目的は、上に述べてきた独占的要素とか、経済外的強制とか、あるいは詐欺とか、こういった要因によってつくり出される、紛うことなき不等価交換と搾取に反対するというところにあるのである。⁽⁵⁸⁾」

陳隆深教授はこの袁文祺教授の主張に対して、次のように批判される。「国際商品交換に価値移転が存在しない以上、富国の貧国に対する搾取も存在しないわけであるから、残すところは比較利益ということのみとなる。……国民の労働生産性を高めるということを考える必要はない」。⁽⁵⁹⁾

筆者の国際価値に関する理解からすれば、陳隆深教授の搾取に関する解釈とは意見が異なるとはいえ、筆者はこの陳隆深教授の批判的意見は重視すべきものとする。発展途上国の貿易政策を考えていく場合、労働生産性の観点を外すことはできない。

さて最後に、途上国貿易政策に対する筆者の基本的視角を示して稿を終えることにしよう。

筆者の観点からすれば陳隆深教授の政策的視座に基本的に賛成である。しかし、途上国の側からみれば、理論的出発としての搾取論には、貿易を通じて“搾取される”という観念がつきまとうため、時として短絡的、また急進的な閉鎖的自力更生論に陥りかねない性格が内に秘められている点が問題である。

世界（国際）市場価値論から引き出される政策的主張のメリットは、国

国際分業を積極的に推進していくべきだという主張が明確に浮かび上がってくることである。この意味から、国際競争ということが強く認識されるようになる。中国の事情に照らしていえば、改革・開放政策に転ずる前の時代の貿易に対する認識を一新するに、この観点は大きな貢献をしたと思われる。中国でこの方法で推進された貿易が大きな成果をあげたことは周知のところである。しかし、世界（国際）市場価値論そのものでは固有に国際競争力の内容が議論されることが少ないことから、国際貿易における労働生産性のもつ役割についての問題を否定しているわけではないものの、その前面にでる主張からは、国際貿易における労働生産性のもつ役割についての意識がやはり薄れてくることは否めない。

世界（国際）市場価値論の主張に代表されるような国際分業の推進が、従来中国で実現の機会がなかった潜在的な貿易利益の可能的部分に実現の機会を与えたことはまちがいないとしても、短期的観点からのみする基準を越えた長期的観点からは、積極的な国際競争力の創出—労働生産性の向上—の視点が必要となつてこよう。陳隆深教授の指摘するように、従来の比較優位部門の労働生産性の向上と戦略的輸出部門の創出が重要な課題となつてくる。

動学的に改造された“比較生産費説”を政策的に運用していくという視点が、世界（国際）市場価値論と結合される必要が出てくる。

このように考えてくると、筆者がここでいう国際貿易関係における労働喪失論の立場は、静学的な観点から貿易の利益とその積極的 pursuit を主張する世界（国際）市場価値論の政策的含意を内化し、一方で国際貿易における労働生産性のもつ役割を重視し、労働生産性の向上とこれと結び付けた動学的国際競争力の創出の過程を視野にいれ、かつ国際貿易関係を搾取ととらえる立場のなかに含まれる、時として登場の機会を許す、短絡的、急進的な閉鎖的自力更生論を封じ込めることができるのではないかと考えている。

国際経済秩序の変革との関連でいえば、独占的要素とか、経済外的強制

とか、詐欺とかの要因による搾取に対する闘争のみでは十分ではあるまい。少なくとも、動的な国際分業の展開のための障害を打ち壊していくための戦いが必要となってこよう。

中国の実情に即していえば、輸出は、①静学的比較優位部門の輸出機会の増大、②相対的動態化の過程を経る中で推進される輸出の増大、③動学的観点から戦略的に創設する輸出部門に分けることができるが、①と②の一部にとっては独占的要素とか、経済外的強制とか、詐欺とかの要因による搾取に対する闘争が主要な関心事となるが、②の一部と③にとっては、それをこえる動的な国際分業を展開していくための条件を創り出すための闘争が必要となろう。管理貿易は静学的次元における保守的調整方法と考えられるが、国際経済秩序の変革を進めていく過程で、この保守的性格の管理貿易をどのような形で止揚していくかも、国際経済秩序の新構築の重要な課題の一つと考えられる。

〔注〕

- (1) 陳隆深「関于国際価値的若干問題」、『国際貿易』, 1983年第6期論文。
- (2) カール・マルクス著、江夏美千穂・上杉聡彦訳『フランス語版資本論』, 下巻, 法政大学出版局, 1979年, 209～210頁。
- (3) 同上書, 210頁。
- (4) カール・マルクス著「資本論」, 邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』, 第23巻, 第2分冊, 大月書店, 1966年, 728頁。
- (5) 同上書, 同上全集, 同上巻, 第1分冊, 1965年, 62頁。
- (6) 同上書, 同上全集, 第25巻, 第1分冊, 1968年, 298頁。
- (7) 陳隆深「関于国際価値的若干問題」、『国際貿易』, 1983年第6期, 16頁。
- (8) 前掲書, 前掲全集, 前掲巻, 前掲分冊, 298頁。
- (9) カール・マルクス著, マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会訳『剰余価値学説史(〈資本論〉第4巻)』, 第3分冊, 大月書店, 1974年, 133頁。
- (10) 陳隆深「関于国際価値的若干問題」、『国際貿易』, 1983年第6期, 16～17頁。
- (11) 同上論文, 17頁。
- (12) 袁文祺「再評現代国際貿易中不等価交換和価値転移論」、『国際貿易』, 1983年第9期論文。
- (13) 同上論文, 20頁。

- (14) 同上論文, 18頁。
- (15) カール・マルクス著「資本論」, 邦訳『マルクス=エンゲルス全集』, 第23巻, 第2分冊, 大月書店, 1966年, 728頁。
- (16) 同上書, 同上全集, 同上巻, 同上分冊, 728頁。
- (17) 同上書, 同上全集, 第23巻, 第1分冊, 1965年, 418~419頁。
- (18) 袁文祺「再評現代国際貿易中不等価交換和価値転移論」, 『国際貿易』, 1983年第9期, 18頁。
- (19) カール・マルクス, 資本論草稿集翻訳委員会訳『資本論草稿集—経済学批判(1861—1863年草稿) I・④』, 第1分冊, 大月書店, 1978年, 513~514頁。傍点部分は原著者。
- (20) カール・マルクス著「資本論」, 邦訳『マルクス=エンゲルス全集』, 第25巻, 第1分冊, 1968年, 298頁。
- (21) 袁文祺「再評現代国際貿易中不等価交換和価値転移論」, 『国際貿易』, 1983年第9期, 19~20頁。
- (22) 陳隆深「即使按国際価値交換労働生産率の差異也能引起不等価値交換」, 『世界経済』, 1983年第6期, 21~22頁。
- (23) 同上論文, 同上誌, 22頁。
- (24) 袁文祺「再評現代国際貿易中不等価交換和価値転移論」, 『国際貿易』, 1983年第9期, 20頁。
- (25) 同上論文, 23頁。『馬克思恩格斯全集』, 第23巻, 人民出版社, 1972年, 614頁でも改訳されている。なお, カール・マルクス著「資本論」, 邦訳『マルクス=エンゲルス全集』, 第23巻, 第2分冊, 1966年, 728頁では, 「その度量単位は世界的労働の平均単位である。」と訳されている(邦訳部分についての付記は片岡)。
- (26) カール・マルクス, 資本論草稿集翻訳委員会訳『資本論草稿集—経済学批判(1861—1863年草稿) VI・⑨』, 大月書店, 1994年, 29頁。
- (27) 袁文祺「再評現代国際貿易中不等価交換和価値転移論」, 『国際貿易』, 1983年第9期, 20~21頁。
- (28) 陳隆深「關於国際価値的若干問題」, 『国際貿易』, 1983年第6期, 15~16頁。
- (29) 陳隆深「即使按国際価値交換労働生産率の差異也能引起不等価交換」, 『世界経済』, 1983年第6期, 21~22頁。
- (30) 同上論文, 同上誌, 22頁。
- (31) 袁文祺「再評現代国際貿易中不等価交換和価値転移論」, 『国際貿易』, 1983年第9期, 19~21頁。同上「在国际交換中労働生産率の差異不会導致“価値転移”」, 『世界経済』, 1983年第6期, 3~4頁。
- (32) カール・マルクス著, マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳『剰余価値学説史(〈資本論〉第4巻)』, 第3分冊, 大月書店, 1974年, 132~133頁。

- (33) 陳隆深「關於國際價值的若干問題」,『國際貿易』,1983年第6期,17頁。
- (34) 袁文祺「再評現代國際貿易中不等價交換和價值轉移論」,『國際貿易』1983年第9期,22頁。
- (35) 王林生「關於對李嘉圖比較成本說的評價問題」,中國國際貿易學界秘書處編『國際貿易論文選』,對外貿易出版社,1982年,105頁。
- (36) 世界(國際)生產價格的成立を主張する論者達の見解については、本稿の議論の対象ではないから、ここではふれないことにする。
- (37) 陳琦偉「論國際價值—比較利益論科學內核的再探討」,中國人民大學書報資料社『復印報刊資料下5,貿易經濟』,1982年第6期,193頁。
- (38) カール・マルクス著「資本論」,邦訳『マルクス=エンゲルス全集』,第23卷,第1分冊,大月書店,1965年,419頁。
- (39) カール・マルクス著,江夏美千穂・上杉聡彦訳『フランス語版資本論』,下巻,法政大學出版局,1979年,210頁。
- (40) 松本久雄著『國際價值論と變動為替相場』,新泉社,1995年,86頁。
- (41) 同上書,89頁。
- (42) 王賽惠「在世界市場上沒有統一的國際價值」,『世界經濟』,1983年第6期,20頁。
- (43) 宋承先「馬克思國際價值理論初探—兼論李嘉圖比較成本說與勞動價值論的關係(中)」,『世界經濟文匯』,1984年第2期,33頁
- (44) 同上論文,同上誌同上期,同頁。
- (45) 同上論文,同上誌同上期,34頁。
- (46) 木下悦二「國際價值論と貿易利潤—柴田固弘氏の批判に應えて—」,『東京經濟大學會誌』,第138号,1984年,18頁。
- (47) 王林生「勞動生產率的差異不是產生不等價交換的原因」,『世界經濟』,1983年第6期,5頁。
- (48) 木原行雄「輸出による超過利潤の本質⁽¹⁾—國際價值試論—」,『東京經濟大學會誌』第137号,1984年,336頁。
- (49) 同上論文,同上誌同上号,316頁。
- (50) 木原行雄「國際貿易における不等價交換について(下1)」,同上誌第126号,1982年,131頁。
- (51) 王賽惠「在世界市場上沒有統一的國際價值」,『世界經濟』,1983年第6期,21頁。
- (52) 木原行雄「國際貿易における不等價交換について(下1)」,『東京經濟大學會誌』第126号,1982年,130頁。
- (53) 同上論文,同上誌同上号,121頁。
- (54) 陳隆深「關於國際價值的若干問題」,『國際貿易』,1983年第6期,17頁。

- (55) 同上論文, 同上誌, 17~19頁。
- (56) 袁文祺「再評現代國際貿易中不等價交換和價值轉移論」, 『國際貿易』, 1983年
第9期, 22~23頁。
- (57) 同上論文, 同上誌同上号, 23頁。
- (58) 同上論文, 22頁。
- (59) 陳隆深「關於國際價值的若干問題」, 『國際貿易』, 1983年第6期, 19頁。